2024年12月15日　説教「エッサイの根は栄光に輝く」

イザヤ書11章1～10節

イザヤ書の著者は預言者イザヤでアモツの子（1:1）とあります。イザヤは紀元前740年あたりから690年あたりにかけて働きました。その召命については6章に証しされていますが、およそ20歳ごろであったと考えられます。イザヤ書はメシヤ預言が多く記されていて、今朝も学ぶ箇所はメシヤの誕生預言です。53章にはその受難についても預言されています。

１．エッサイの根株に主の霊が（1～5節）

①エッサイの根株から（1）**「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」**

エッサイというのはダビデの父です。その「根株から新芽が生える」とありますが、木にたとえられたエッサイの家は衰えて切られてしまっていたと読めば良いのでしょう。見栄えはしない木となっていたのです。ところが、その根株から新しい芽が出て成長していき、そこに新鮮な若枝が伸びていくというのです。そしてついにそこには実が実るというのです。

②主を恐れる霊（2～3）**「その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。この方は主を恐れることを喜び、その目の見ることによってさばかず、その耳の聞くところによって判決をくださず」**

その木の若枝から生まれた実にたとえられているのは、麗しい存在でした。そして、その方の上には主の霊がとどまるというのです。具体的に言えば、その方は知恵に富み、悟りの極みともいえる霊であり、主を知る知識と力（勇気）、主を恐れる霊なのです。その方は、目や耳で認識できることだけで、さばきをすることがなく、主を恐れて真実を見いだす霊なのです。

③正義は腰の帯と（4～5）**「正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。正義はその腰の帯となり、真実はその胴の帯となる。」**

その方は事柄の本質を見つめつつ、不変の正義をもって、寄る辺がなかったり、貧しかったりする、弱い者たちの味方となってくださるのです（リビングバイブル）。逆に不法でむごい仕打ちをするような者たちは容赦なく打たれるのです。その方の腰には正義という帯が巻かれ、その胴には真実という帯が巻かれているのです。

２．肉食動物と草食動物が（6～8節）

①ひょうは子やぎと（6）**「狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。」**

その方の来られるとこのようなことがあるというのです。狼は子羊を襲うことなく、ひょうも子やぎを殺すことがなく共にくらすというのです。また、小

さな牛と若いライオン、肥った家畜が共生し、さらに人間の小さな子どもがそれらの動物の後を追っていくというのです。

②獅子もわらを（7）**「雌牛と熊とは共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。」**

熊は雑食ですから草も食べることもあるでしょうが、雌牛と仲良くし、その子供達も共に遊んでいるというのです。さらに、肉食の獅子（ライオン）が動物を食うのではなく、牛のようにわらを食べるという穏やかさ。

③乳離れした子はまむしの子に（8）**「乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。」**

さらに、人間の乳飲み子が毒蛇であるコブラの巣の穴あたりで遊んでいても心配がなく、乳離れした子供も猛毒をもつことがあるまむしの子に手を伸ばしても守られていつというのです。

３．国々は彼を求め（9～10 節）

①主をしることが（9）**「わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。」**

6 節から 8 節にあるような光景を、ここには聖なる山とまとめられています。そこにおいて、これらの動物たちは害を加えることをせず、滅ぼしたりするようなことはないというのです。その聖なる山においては、何よりも主を知ることが最も価値あることとであり、その精神は水が海を覆うように、地に満ちていくというのです。

②民の旗として（10）**「その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。」**

そのようにして来られる方はすばらしい恵みと平和をもたらすことになり、元は切られてしまい衰退の一途をたどると可能性のあったエッサイの根はすべての民の旗印として立てられることになるというのです。そして、民はそれぞれが、救い主として来られるその方を求め、その方のいらっしゃる所には真のくつろぎがあり、栄光に輝くことになるというのです。

《結論》

アドベント礼拝の三週目です。そこで、今朝はイザヤ書からメシヤの誕生預言に関する箇所から学んでいます。今朝も三つのポイントで学びましょう。

第一に、その方、メシヤ（救い主）は、エッサイの根株から出るという点です。既に見て来たように、その木は弱ってしまったか、何らかの理由で切られてしまい、切られてしまったということです。実際のエッサイはサウルからは侮蔑の言葉で言われることがありました。しかし、その切り株から新芽が出て、若枝となり結実していったのです。事実、エッサイの子ダビデは王となり信仰者としても大きな存在となりました。そして、マタイの福音書 1 章のヨセフにつながる家系図を見ると、ダビデ以降も信仰はそれなりに引き継がれているのですが、バビロン移住の後（12 節以降）の名前の人々の名は実際のところ、確かめようもないのです。そして、そのような流れのなかからヨセフにつながり、イエス・キリストの誕生を見ることになるのです。ですから、イエスキリストが生まれる 10 代ほどはユダヤ民族のなかにあっても、注目されてはいなかったと考えられます。しかし、そこから真の若枝である、イエス・キリストがお生まれになるのです。私どもがここから学べるのは、主の恵みというのは、人間の見る眼とは違うところにおいて、豊かに注がれるということです。人間的に落ちぶれたと思われるところに、主は考えてもみなかった御手を伸べられるのです。「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」（Ⅱコリント 12:9）を覚えていきましょう。

第二に、6～8 節に示された驚くべき平穏の世界についてです。そこには、肉食の動物と草食の動物が共存し、それぞれの子供たちが何の心配もなく一緒にいる姿が示されています。また、乳飲み子がコブラの穴の上で戯れているなどというのも、親も全く心配せずに安心している状態です。そして「獅子も牛のようにわらを食う」というのもすごいですね。牛については専門家がいらっしゃるので、恐縮なのですが、たまたま昨日の新聞に載っていたことを受け売りでお伝えします。それによると、「牛は胃を四つもっていて、第一の胃の中には細菌や真菌といった微生物がたくさん住んでいる」「ここで、肉食動物や人間が利用できない栄養素を分解してアミノ酸というたんぱく質の材料に変え、やがてこの微生物が第四の胃に運ばれて、ドロドロに溶かされて、小腸でアミノ酸などとして吸収され、牛の筋肉をつくる材料になる」のだそうです。私には今でもよくわかりませんが、ともかく獅子（ライオン）もワラを食べて、筋肉をつくるようになるというのです。今日、あちらこちらでの戦争がおさまりません。救い主による真の平和が、私達の内に働いてこうしたことも実現するのです。また、再臨の主がそれを最終的に完成してくださるのです。平和の主が、私たちのうちにも、平和を備えて下さるよう祈りましょう。

第三に、その平和の世界の根本は「主を知ること」だという事です。それが海をおおう水のように地に満ちるというのです。2節には「**主を知る知識と主を恐れる霊**」とあり、主を知ることは、その方、メシヤのうちに満ち満ちているというのです。J.I. パッカーは言います。「神を知るということは、神のあわれみを求め、イエスのゆえに罪人をゆるすための神のみわざにより頼むことだ」と。主を知ることは、情緒が高まることではなく、主への服従にあるとも述べます。また、詩篇 16 篇 8 節をあげています。「私は、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことはない。・・」（「神について」より）。主を知ることは、単に知識ではありません。その存在で主を知ることです。ともに求めていきましょう。そして、私たちが主を知っていくことが、アドベントにふさわしく、私たちの周辺の平和につながり、ひいては国と国の間の平和にも広がっていくと覚えたいのです。これはこの年のアドベントの語りかけです。

讃美歌 96 の3「たえにとおとき、イエスの御名の、かおりはとおく、世にあまねし　いざやともに、喜び祝え、この良き日を」。ご降誕の主を待ち望みつつ、真の平和を希求していきましょう。